

生と死を考える会 全国協議会

発行者：「生と死を考える会全国協議会」

発行所：657-0066 神戸市灘区篠原中町 2-1-29-107 「兵庫・生と死を考える会」

TEL & FAX：078-805-5306 E-mail：seitoshi@portnet.ne.jp

URL：http://www2u.biglobe.ne.jp/~shinai/seitoshi.htm

2016年度「全国大会」特集

・ 会長挨拶 1	・ 分科会（平野先生） 13
・ 全国大会開会 3	・ 分科会（欠端先生） 14
・ 代表者会議 4	・ 分科会（石川先生） 15
・ 役員名簿 6	・ 全体講演（写真のみ） 16
・ 講演（水野先生） 8	・ 全体講演（高木先生） 17
・ 研究会（グリーフケアの在り方） 9	・ 懇親会写真集 18
（会の運営方法） 12	

生と死を考える会全国協議会

会長 高木 慶子



ご挨拶

全国大会が終わりましてから、すでに3か月が経過しておりますが、その後、皆様方におかれましては、お健やかに過ごしのこととお喜び申し上げます。

この度の大会では、NPO法人「千葉県東葛地区・生と死を考える会」の25年の記念すべき年に、私ども全国の会員が集う大会を開催していただき、こころから感謝いたしております。

また、改めまして「千葉県東葛地区・生と死を考える会」の皆様方には、この25年の間、寛大な尽力を遊ばされましたことに対して、こころからの敬意を表しますとともに、今後のご活躍を念願いたしております。

またこの度、全国協議会の副会長でもあられます水野治太郎先生におかれましては、瑞宝中綬賞を受賞遊ばされましたことを、全国協議会の会員一同こころから喜びお祝いを申し上げます。

長年にわたる教育に邁進されました業績が日本中に認められ、実ったものでございましょう。先生の直向きな教育者として、また学者としてのお姿が、多くの人々と、とりわけ「痛み、悲しむ人々への眼差し」が、この偉大な受賞となって示されたものと心からお祝いを申し上げます。先生が受賞されましたことは、私どもの喜びであり、また誇りでもございます。どうぞ、これからも多くの人々のために教育者として、また、寄り添い人として、ますますご邁進いただきますよう、心底よりお願い申し上げます。

さて、改めまして2017年度の大会につきお知らせいたします。

過日の大会時には、デーケン先生がご出席になられますようにと、東京での開催を考えておりましたが、デーケン先生のご容態が芳しくなく、イエズス会のロヨラハウスに移動されましたので、大変に残念ではございますが、来年度の全国大会を、大阪ですることといたしました。

デーケン先生の件では、ご心配をお掛けしておりますが、急にお悪くなられたので

はなく、年齢のこともあり、もし、お見舞いなどをお考えの時には、一度私どもにお聞きいただきたいと思いますと思っております。

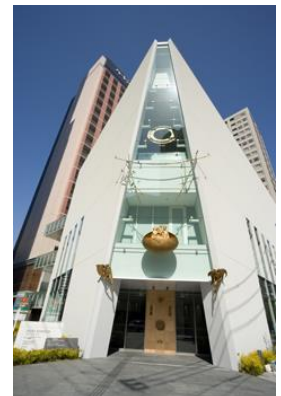
長年にわたり日本のためにご尽力いただきましたこと、特に私どもの会を立ち上げられ、日本社会から死のタブーを解き放つ第一歩をしるされました業績にたいしまして、こころからの感謝を申し上げたいと念じておりますし、全国の会員として、お祈りを続けて参りたいと願っておりますので、よろしくお願いいたします。

来年度の大会の主催は「兵庫・生と死を考える会」になります。日時につきまして、会場の件もあり、

2017年9月2日(土) 11:00~

3日(日) 16:00

といたしますので、どうぞ、皆様方のスケジュールにお書込みいただきますようお願いいたします。会場は大阪市北区豊崎3-12-8「上智大学大阪サテライトキャンパス」です。



では、良き新年をお迎えいただきますよう、また、これまでの皆様方の、本会へのご協力と尽力に対しまして、心底より感謝のお祈りをいたしておりますことを、お伝えさせていただきます。



2016年度「生と死を考える会全国協議会」全国大会は、NPO法人「千葉県東葛地区・生と死を考える会」の主催で2016年9月24日・25日に麗澤大学で開催されました。テーマは「響き合う命—支え合う<生と死>」です。

2016年は麗澤大学の創立者・廣池千九郎博士の生誕150年にあたる記念すべき年であり、また「千葉県東葛地区・生と死を考える会」4の創立25年にもあたり、森に囲まれた学園のキャンパスのなかで麗澤大学の学生さんたち、ボランティアの方々のご協力のもとで開催されました。

大変充実したプログラムで、多くの一般市民の方も参加されていました。



開会挨拶：廣池幹堂 学校法人廣池学園理事長
公益財団法人モラロジー研究所理事長



開会挨拶：高木慶子会長

代表者会議

生と死を考える会全国協議会 2016年度代表者会議

議事録

場所：NPO法人 千葉県東葛地区・生と死を考える会

柏市光ヶ丘2-1-1 麗澤大学

日時：2016年9月24日（土）11：52～12：40

開会挨拶 高木会長

この協議会は小さな会の集まりですが、各々が責任をもって協力して下さっていると思っています。ここにお集まりいただいている方は、実際に活動されている方ですね。その方たちに心から感謝申し上げます。一つでも元気に活動されている会が存在する限り、デーケン先生がお元気な限り、続けたいと思っています。デーケン先生は今は心臓がちょっとお悪くて手術なさいました。これは順調に進んだそうです。ところが入院されている間、すっかり足が弱ってしまわれたそうで、現在リハビリで入院中で、車いすで動いておられるそうで、この度はおいでになりません。デーケン先生は何と言ってもこの「生と死を考える会」を日本で立ち上げて下さった方ですので、来年の全国大会はデーケン先生が出席できるように上智大学を借りて開催したいと思っています。それも賑やかな会というよりも勉強を大事にした会をしたいと考えています。これから上智大学にお願いしますので、決まったら、お知らせします。では代表者会議を開きます。



議長選出 高木会長

書記選出 久本（兵庫・生と死を考える会）

（出席者確認）道南・福島・ひたち・埼玉・千葉県東葛・船橋・大和・豊橋ホスピス
・あいち・兵庫・びんご・松江・芳縁・熊本 合計 14 団体 46 名

議題1 2015年度活動報告

① 全国大会 山田運営委員より

2015年9月19日・20日に道南・生と死を考える会の主催により函館市で開催した。
第一日：函館中央病院で運営委員会・デーケン先生講演会・分科会・代表者会議・ホテル
法華倶楽部で懇親会。柳田先生も遅れて来られましたが、皆さんと歓談出来ました。

第二日：函館市市民会館大ホール

テーマ「若者と語るいのちの話」

*いのちについて：ウエスト・ヒルズ・プロジェクト（道立函館西高等学校 有志）高校生の自発的な会なのですが、ホスピスなどに行った体験などを話してくれました。

*講演 高木慶子会長

*講演 柳田邦男先生

ちょっと参加者が少なくて残念でしたが、無事終わることが出来ました。

② ニュースレター発行 2016年1月

議題2 2015年度決算報告（2015.4. 1～2016.3. 31）
と監査報告

（別紙1）

* 吉田監事より監査報告

* 提案通り承認された

質疑

*生と死を考える福島：会費の納入が予算と大きく違うのはどうしてですか。

*牛尾会計担当：納入されるところが予定より少なかった。昨年度は2回会費の請求をしたが、納入は47団体中24団体。会費は会員数によって決めているので、会員数の減少もあると推測している。



議題3 2016年度行事予定

① 全国大会 2016年9月24日・25日にNPO法人「千葉県東葛地区・生と死を考える会」の主催により麗澤大学で開催する。

②ニュースレターを発行予定

議題4 2016年度予算案（2016.4. 1～2017. 3.31）

（別紙2）

*昨年度の全国大会の時に、会費収入が減少し、繰越残高が年々減少しているので、全国大会開催団体に開催費の支出をやめる案が出されたが、表決を取っていなかったため、予算案には計上した。

会長：先ほどの運営員会で全国大会開催費は本年度より開催団体に差上げられないことにする案が通りましたのでこの代表者会議にお諮りします。皆さまのご意見はいかがでしょうか。

*承認された。

有難うございます。今後開催して下さる団体の皆さまには、よろしくお願いたします。



*よって原案より補助金を抹消して、
(別紙2)の通り承認された。

*水野副会長：最初から補助金はないつもりで計画した。地域密着型の活動をしている関係で柏市にお願いしましたら、自殺対策の予算から助成金を頂くことが出来、麗澤大学創立者の生誕150年でその一環の事業として麗澤大学からの助成金と、個人からの寄付金、会員の方からの参加費でうまくいっています。このように地域で根を張っていくことが大事ではないかと思ひます。

議題5 役員の選出

*会長：現在の役員の方々には引き続きお願したいと思ひます。

新役員として「兵庫・生と死を考える会」の山口 元副会長・伊藤裕美理事・田所奈美理事を推薦したいと思ひます。

会場の方で、どなたか、推薦していただける方はありませんか。

松江の清水さんは毎回全国大会に出席して下さっていますが、いかがでしょうか。

*清水：私達の会は5人ほどで細々と活動しててまだ会則も作ってありませんが、ふさわしいのでしょうか。

*会長：会が大きいとか小さいとかは関係ありません。熱心さと熱意が無いとどんな大きい会でも無理だと思ひます。清水さんの会はそういう会だと思ひます。おねがひします。

* 役員の留任と新任は承認された(別紙3)

生と死を考える会全国協議会 運営委員名簿		
		2017年4月1日～2019年3月31日
名誉会長	アルフォンス・デーケン	東京・生と死を考える会
会長	高木慶子	兵庫・生と死を考える会
副会長	水野治太郎	NPO法人千葉県東葛地区・生と死を考える会
副会長	佐藤 健	豊橋ホスピスを考える会
監事	吉田俊雄	兵庫・生と死を考える会
監事	宮本康志	熊本・生と死を考える会
会計	久本順子	兵庫・生と死を考える会
会計	牛尾啓子	兵庫・生と死を考える会

運営委員	山田 豊	道南・生と死を考える会
運営委員	豊原則子	富山・生と死を考える会
運営委員	加藤 誠	東京・生と死を考える会
運営委員	古谷小夜子	大和・生と死を考える会
運営委員	永井照代	あいちホスピス研究会・ローズマリーの会
運営委員	山本昌知	岡山・生と死を考える会
運営委員	数野 博	びんご・生と死を考える会
運営委員	伝明地祥江	兵庫・生と死を考える会
運営委員	松本信愛	兵庫・生と死を考える会
運営委員	田中亮子	熊本・生と死を考える会
運営委員	山口 元	兵庫・生と死を考える会
運営委員	小野裕美	兵庫・生と死を考える会
運営委員	田所奈美	兵庫・生と死を考える会
運営委員	清水久仁子	松江・生と死を考える会
生と死を考える会全国協議会		顧問
・日野原重明	・遠藤順子	・山崎章郎
・柏木哲夫	・柳田邦男	

議題6 その他

*特になし

以上



第1日目 講演

遺族ケアに学ぶ

喪失後の人間的成長・成熟

PTG (post traumatic growth)

水野治太郎

麗澤大学名誉教授

生と死を考える会全国協議会副会長

NPO 法人 千葉県東葛地区・生と死を考える会理事長



水野先生のお話は三つの内容で話されました。

1 麗澤大学が生と死を考える適切な場所である理由

麗澤大学の草創期の創立者・廣池千九郎（ひろいけちくろう）博士は、人生の最盛期に大病にかかれ、死を見つめるなかで、新たな生を探求され、新しい道徳学「モラロジー」を構築されて、その普及に努められ、麗澤学園を創立されたそうです。病気を乗り越えることができたのは、独自の悟りの境地を得られたとともに、多くの人の献身的な支えがあったそうで、人と人の結びつきが大切だと教えておられるそうです。

2 デスカフェとはなにか、どう進めるのか

デスカフェはスイスでやく12年前にバーナード・クレッタズという方がはじめられ、カジュアルな雰囲気の中で死について語り合おうというもので、ベルギー・フランスへと広まる中、イギリスで大きく育ったそうです。



Death café で大切にされていることは

- ① 一人ひとりが自由に自分の考えを表現できるようにすること
- ② 特定の結論を出そうとしないようにすること
- ③ カウンセリングやお悩み相談になりすぎないようにすること

3 グリーフケアの再定義と新課題・・・PTG

人生再構築のためのグリーフケア

『人生途上では、新しい人と出会う事、新たな知識や技術を得て世界を広げることがあると同時に、喪うこと、挫折することもある。喪失や挫折体験者に寄り添い、その語りを傾聴し心の傷みを分かちあうと共に、未来に向けた人生再構築へと思念するサポート的役割を遂行することをグリーフケア（grief care）という。従って喪失による悲嘆は人間的成長への手がかりになるという立場にたち、ナラティブ的傾聴法を重視する。それは人生の知恵を探求する対話法である。いま医療・看護・福祉・教育・人文社会学の広い領域で影響を与えつつある、あたらしい知がナラティブである。』

喪失後の人間的成長とは、喪失の否定的影響ばかりに目むけることを減らし、新たな目標や意味の発見などの回復志向の問題に目を向けることによって出来る。

グリーフケアの公共的使命は、喪失者体験者の孤立化の防止のために仲間などによる支え合い連帯感を強める。喪失体験者が安心して心の傷みを分かち合い、喪失から得たものに気付き、互いの人間的成長・成熟を見守り、輪を広げていく。また人生には必ず喪失・悲嘆・挫折があると心の準備をしておくなど、グリーフケアの場は互いの人生を再創造するため霊場、自分の見極めるこころの霊場と言える。

グリーフケアの公共性 として

- 1 安心して泣ける場所を設ける
- 2 自分の体験を他者に語って居場所を作る。（孤立化の防止）
- 3 語りを傾聴する人の役割（聴き手の養成）
- 4 語り直しまで寄り添う（自省を込めた新しい語りへの転換）
- 5 人生の再構成・再構築へ・・・グリーフ教育の担い手と

とお話しになりました。

（水野先生のレジメより引用）

~~~~~

#### 第1日目 研究会

### 《グリーフケアのあり方》

メンバー : 高木会長・吉田（兵庫）・吉澤（ひたち）・清水（松江）・伊集院（兵庫）加藤（熊本）・鈴木（豊橋・生と死）・金山（埼玉）・今西（埼玉）・平賀（埼玉）・鈴木（福島）

分かち合いの会をどのように開催しているか

加藤（熊本）：毎月1回の例会の後に開催。

グループ分けしている ①講演を聞きに来られた方 ②グリーフの方  
他に ・ガンサロン・病院からの依頼で分かち合い会

伊集院（兵庫）：月に2回

対象者を分けている

- ・午前：自死遺族
- ・午後：病死・事故死のご遺族を子どもさんを亡くされたご遺族とその他のご家族を亡くされた方に分けて来られた時と帰られる時のお顔を観察お茶と小さなお菓子を用意

高木会長：自死遺族と認められたくない方と、家族は自死を選んだのに警察から事故死と言われると怒られる方もあって複雑です。



清水(松江)：まず電話で問い合わせがある。インターネットで調べて。新聞にも載せてもらっている。何も出来ませんとは言わないで、来られるかどうか分からないけれど、参加者に選んでもらう。すこしずつ参加者があるので、自分にとってもよい。

吉澤（ひたち）：前会長が亡くなられて引受けた。

分かち合いの会は継続している。2か月に1回。雑談になり世間話になるのが悩み。  
参加者が増えない。体験を話してくれる人が無い。  
広報は市報と読売にお願いしている。  
活動として講演会をしたいが難しい。

鈴木（豊橋生と死）：二人でやっている。

去年は参加者が少なかったが、新聞に掲載をお願いしたら、5～11名も来られる。  
参加者は女性が圧倒的に多いので、男性が話しにくい。バランス良く話してもらうのが難しい。

すぐに答えがほしいと言う人が多い。

自死の方、子どもさんを亡くされた方はまだ来られていないが、もし来られたらと不安。

今西（埼玉）：分かち合いの会に参加している当事者です。

お茶・お菓子・お花にホッとすると感じる。男性は一人だがそれはそれで分かち合っていると

平賀（埼玉）：20年くらい関わっている。

前もって準備しないで成り行きに任せている。

参加者は10人くらいで、グループ分けはしない。

会が終わってからそれぞれのグループでお茶に行かれている様子。

吉田（兵庫）：属しているのは兵庫ですが、東京に在住して、東日本大震災の被災地でグリーフケアに関わっている。

自分で求めて来られる方が多い。

仮設住宅での談話室・おちゃっこサロンで震災体験からの個別のグリーフを聞く。

感じることは、東北の方は我慢強いということ。

深い絆をもっておられる。

他所の人だから話せるとおっしゃる。

まだご遺体の上がってない方のグリーフは深く大きい。

個別で対応。

鈴木（福島）

20年続けている。

分かち合いの会を柱としているがスタッフ不足。

6年前に妻をガンで亡くし一時低迷。

市民団体・ガン患者の会、どこかの市民をネットワークで情報を共有しながら組んで活動したい。

加藤（熊本）

分かち合いの会を長くやっている人は自分の気持ちをどう整理しているのか。

高木

人の苦しみを聞いて聞いても、元気でいられるのは、自分をありのままに受け入れて下さる方が必要、人智を超えた方に頼らないと、苦しみを伺う事は出来ない。

人の苦しみを受け取る時に、魂をゆすられるようなことを伺った時に、自分の心身をどうするかというと、私には3人のスーパーバイザーがいると言っていましたが、他人の力ではダメです。必死に祈ります。

鈴木（福島）

スタッフ会議で話し合うが落ち込んでしまうときがある。スタッフどうして話したり、医療心理士を1年に1度迎える。

高木

今度の相模原の事件・軽井沢のバス事故の遺族のケアは本当にしんどいものです。でもグチと守秘義務ははっきり分けないとけません。

吉田

長年被災地をケアしていて、疲労困憊した時に歩いてみました。少し元気を取り戻したので一日一万歩歩こうとカメラを持って歩いています。楽しみも増え、私自身のリフレッシュです。

金山

自分を犠牲にした分だけ、いただけるものがあり、心が治まると、最初の頃はそう思っていたかもしれないが、右往左往しながらここまで来たと思う。

高木

ケアをしていて、その方の苦しみを共有すると、共に元気になる。



(文責事務局)

## 《会の運営方法》



私の参加した運営方法グループは豊橋ホスピスを考える会 佐藤健氏がとりまとめ役、松江・びんご・熊本・道南・船橋の生と死を考える会、各々1名。大和生と死を考える会、あいちホスピス研究会 2名、グリーフケア芳縁 2名。そして、私たち 兵庫生と死を考える会から 6名の合計 9会・18名が参加しました。

まず、自己紹介を兼ねて、各々の活動や運営状況を全員が報告しました。どこもほぼ例外なく、会員の減少傾向・高齢化によりマンパワーの不足が否めない状況とのこと。去る者は追わず、来るものは拒まずの方針でいくしかない。量ではなく質だ、というように考えざるを得ずに活動していると言うような発言が重なりました。

また、殆ど全ての会が会費収入のみをあてにした状況で、活動の殆どがボランティアに負うところが多いとのこと。

概ねどの会もそのような状況で、運営者側に新しい人・若い人を入れたい。それが目標であり、

課題であるということが浮き彫りになりました。どのようにすればよいかの方法論まで話し合う時間はありませんでしたが、各会ごとに特色があり、活動内容も違うのでやり方はそれぞれに見いだす努力が必要だと感じました。

病院の緩和ケア病棟に携わってその組織の中でのボランティアとしての位置付けに特化して活動している会もあり、一般人に対して、緩和病棟(知らない人が多い)は死にゆく場所のイメージだと定着させたいという意見もでました。しかし、本来「緩和ケア」はがん患者にとって、身体的な症状の他に生じる、落ち込み、悲しみなどの精神的な苦痛のグリーフケアを治療の一環として行うことであり、医療において、緩和ケアは死ぬためのケアではないはずです。幸せを感じて生ききるためのサポートがグリーフケアであると考えます。

私見ですが、ボランティア≠グリーフケアであるべきと思っています。

今後在宅ケアに比重が移っていく。死の準備教育がケアする側にも患者側にも必要だと取りまとめ役佐藤氏の現場の医師としてのご意見で締めくくられました。

今後医療の分野で共存できるグリーフケア実践の場になり得るような運営が望ましい。と、確信が持てた良きプログラムであったと感じました。

(兵庫・生と死を考える会 小野裕美)

## 第2日目 分科会

## 分科会①の講演の報告

## 地域包括ケアと在宅医療柏モデルについて

平野 清（医療法人社団清風会 平野医院院長）

平野講師は、柏市での在宅医療を推進するための取り組み「柏モデル」について説明されました。次のようにまとめることができます。

**一、在宅医療に対する負担を軽減するバックアップシステムの構築について。**

①かかりつけ医のグループ形成によるバックアップ。その方法として、○共同で地域全体を支える体制の構築です。これは一つの診療所が数多くの患者を支えるだけでなく、多くの診療所が少しずつ支えることで多くの患者を支えるシステムを構築することです。○主治医、副主治医制の仕組みの構築です。これは、主治医（患者を主に訪問診療する医師）と副主治医（主治医が訪問診療できない時の訪問診療を補完する医師）とが相互に協力して患者に訪問診療を提供します。②退院時における病院との情報共有や急性増悪時等における病院のバックアップ体制の確保。これについては、平成 25 年に開催された十病院院長会議において病院側と在宅医療側とで次の事項が確認されました。【病院側】・在宅医療への移行時には在宅側の要望を踏まえた様式を使用する。・在宅患者の急性増悪時には原則として退院元の病院が受け入れる。【在宅医療側】・急性増悪時には原則として在宅側スタッフが対応する。・入院時には在宅主治医等から病院の救急担当に対して必要な診療情報や患者・家族の意向を情報提供する。

**二、在宅医療を行う医師等の増加及び多職種連携の推進について**

①在宅医療多職種研修の実施。年に一度、医師及び多職種を対象に「在宅医療総合研修プログラム」を実施しています。第四回の受講者は 64 名で医師、歯科医師、薬剤師、病院関係者、訪問看護師、介護支援専門員、理学療法士、作業療法士、地域包括支援センター職員、管理栄養士等です。②訪問看護の充実強化。このためには看護師の復職フェアを開催したり訪問看護フォーラムを開催したりして柏市内の訪問看護ステーションは増加しています。③医療職と介護職の連携強化について。「顔の見える関係会議」は平成 24 年より現在 8 回目を継続中で述べ 1300 名が参加し柏市の医療・介護関係者が一堂に会し顔の見える関係を構築しています。この会議には厚労省もバックアップし、マスコミからの取材もあり、日本全国から見学者も来ています。

**三、情報共有システムの構築について**

タブレット端末、パソコン等により、関係職種同士（主治医、副主治医、薬局、訪問看護、リハビリ、訪問介護、ショートステイ、緊急受け入れ病院など）がリアルタイムに情報を共有するようになっています。システム画面は登録者のみが見られるようになっています。

#### 四、市民への啓発、相談、支援について

地区社協での在宅医療勉強会の実施、在宅医療情報誌「わがや」の発行、柏市広報による啓発（在宅医療の特集など）を行いここ数年やっと市民の意識も高まってきています。

#### 五、これらのことを実現する中間地点、柏地区医療連携センターの設置

在宅医療を推進し、地域医療機関をサポート及び多職種連携のための中核となる施設で平成二六年四月一日に運用が開始されました。センターの機能として①医師、多職種による在宅医療・看護・

介護のコーディネーター機能。②患者が病院から在宅に戻る際の調整支援機能。③在宅医療に係る主治医及び副主治医の研修機能。④市民相談・啓発機能があります。

これまでの取り組みの成果として、千葉県全体では少ないのですが、柏市は在宅医療支援診療所数、訪問看護ステーション、在宅診療所による年間自宅看取り数、多職種連携ICTシステムID発行数などが増えています。柏市の在宅医療・介護連携推進事業は柏モデルとして厚労省も参考にして事業実施の手引書や事例集の作成をしています。（文責：小川圭子）

~~~~~

分科会②の講演の報告

いのちの深層へ！

欠端 實（麗澤大学名誉教授、一般社団法人・中日文化研究所理事長）

欠端講師は次のような内容で講演されました。

46億年前、地球が誕生し、その6億年後、生命が誕生した。以来、私たちに与えられたいのちは現在に至るまで連綿と続いている。いのちの深層に何があるのか？それを探っていくために、二人の人物の人生に触れてみたい。

一人は明治の文豪、夏目漱石である。43歳で大病を患うが、まわりの人たちの献身的な介護で一命をとりとめる。回復後、自分もまたこの世に生かされている人間であり、自分に手を差し伸べてくれる人たちの背後に、何か宇宙がものを育てるような力があるのを感じた。漱石は大病を転機として新しい境地を開拓した。「則天去私」である。自然、母なる大地にすべてを任せていこうという境地である。

もう一人は、モラロジー研究所、廣池学園創始者、廣池千九郎である。彼も病に苦しめられた人

である。彼も病を得て後、自分のものと思っていた自己のいのちは、宇宙法則に支えられていることに気づき始める。折しも、難病の女性を治したことから自分も治る希望を見出す。彼はこの時代の体験を「誠の体験」と呼び、以後、苦しむ人たちに対して真の心を発現し続けた。

二人は病に倒れた後、いのちは全て根源的なものに支えられ、護られ、すべて繋がっているということを知る。そのことを得心できた時に、真の安心（大安心）が生まれる。いのちあるものも、いのちなきものも皆兄弟。人間も動植物のいのちと共に生きている（ともいき、共生）。その繋がりを再確認し、根源的なものに支えられていることに感謝を捧げる時、エネルギーが沸き起こり、他のいのちに喜んでもらえることをさせていただくことこそ、意味のある生き方だったと人生を肯定できるのである。（文責：太田和枝）

分科会③の講演の報告

若年層・現役世代の自殺予防対策を考えるーゲートキーパー養成と依存症対策の現場から

石川 公彌子（明治学院大学・駒澤大学・和光大学・愛知県立大学非常勤講師）

最初に、日本の2012年の自殺率（人口10万人あたりの自殺者数）は23.1人で、172カ国中9位であったという現状を示し、その後の日本の対策について説明。欧米諸国は減少、韓国は増加し減少に転じつつあること、日本も高齢者層の自殺対策はなされているため、減少傾向にあるものの若年層の自殺率は、上昇しており、自殺防止対策の重点を若者層にシフトする必要があること、また自殺の「隠れた要因」を探り、対策を立てることも必要との提案をいただきました。

若者、現役世代の自殺の背景には、健康問題、家庭問題、経済・勤務問題、男女問題、学業問題などこれらの諸問題を横断する原因として依存症の問題、とりわけギャンブル依存症問題が背景にあることが多いということでした。日本の依存症人口は、アルコール依存症患者、違法薬物依存症（使用経験者）、ギャンブル依存症をあわせると約1559万人と従来考えられていたよりも多いという現実、パチンコなど身近なギャンブルが全国どこにでもあることが海外より率が高い原因ではないか、予防対策の必要性等、有識者の見解を交え説明され、ギャンブル依存症は、回復可能な病気であるという認識が広まり、社会の理解と支援があつてこそ、回復可能であること、人と人とのつながりのなかでお互いを尊重し、失敗してもやり直しができる「誰もが生きやすい社会」が実現できるとのことでした。

また、石川先生ご自身がゲートキーパー養成研修会をお受けになった体験を交え、ゲートキーパー制度についても説明をいただきました。自殺の危険を示すサインに気づき、適切な対応を図ることができる人、具体的には、悩んでいる人に気づき、声かけ、話を聞いて、必要な支援につなげ見守る「命の門番」。一人でも多くの方がゲートキーパーとしての意識を持ち、専門性の有無に関わらず、それぞれの立場でできることから進んで行動を起こしていくことが自殺対策につながると力強くお話されました。講演終了後も自殺対策について活発に意見交換が行われ、活発な分科会となりました。（文責：半田タユ美）



麗澤大学ボランティアの方々

第2日目 全体講演

二日目の「全体講演」では、三人の先生による講演が行われました。



島菌 進（上智大学グリーンケア研究所所長、東京大学名誉教授）
「悲しみを超えて『いのち』の恵に向き合う」



竹内整一（鎌倉女子大学教授、東京大学名誉教授）
「死者と生者の間」



高木慶子

(上智大学特任教授、生と死を考える会全国協議会会長)

「命が輝くために」(要旨)

美しく咲く花や、可愛い赤ちゃんの写真を見ると、命がきらきらと輝いているように見えませんか。なぜでしょうか。花や赤ちゃんも「命が輝いている」と思っているのでしょうか。そうではありません。その写真を見ている人が、「かわいい」「きれい」「輝いている」と思う感性を持っているからこそ、そのように見えるのです。

花も赤ちゃんも「命が輝くため」と思っているのではなく、精一杯生きているだけなのです。命が輝くためには、その命を十分に生きる事、無心に命のエネルギーを生きることではないでしょうか。

「ふるさと」という唱歌があります。

兔追いし かの山
小鮒釣りし かの川
夢は今も 巡りて
忘れがたき ふるさと

如何にいます 父母
恙なきや 友がき
雨に風に つけても
思い出づる ふるさと

志を 果たして
いつの日にか 帰らん
山は青き ふるさと
水は清き ふるさと

「志を果たして いつの日にか帰らん」の「志を果たして」とは、いただいた命を輝やかし尽くしたという事なのではないでしょうか。「私は、いただいた命、能力を使い果たしました」と言える人はすばらしい人生を送られた方だと思います。

すぐに心に浮かぶのは、マザー テレサです。

「もっとも貧しい人々、もっとも苦しんでいる人々の近くに行きましょう。」とその生涯をインドのコルカタで働かれました。晩年のしわをいっぱい刻まれたお写真をみると、輝いておられると感じます。放たれるエネルギーを感じます。動物、植物、大自然、そして 人々の命は輝いていると見え、それを感じられる人の生き方は、他の人々から、その方の生き方自体に「命が輝いている」と感じるのではないのでしょうか。目に見えるもの、目に見えないものにさえ気付くエクササイズをして、命の輝きを自他の中で感じ取りたいと思います。

「響き合う命」という、この全国大会のテーマ、いのちのエネルギーを送り、受け取った方はまた返して、支えながら人生を送りたいものです。

大会閉会挨拶
竹内啓二先生

懇親会写真集





